



森平英也

古河電気工業株式会社
代表取締役社長

グループのトップに就任して3年目の森平英也氏。昨年は、1年半の検討を経て「『つづく』をつくり、世界を明るくする。」という分かりやすくも含蓄あるフレーズの「パー・パス」を制定し、今後はここをよりどころに経営をしていくたいと考えている。

好きな言葉は「信なくば立たず」。信頼がなければ社会は成り立たず、社会をまとめられない。企業経営もまたしかり。従業員、お客様、ステークホルダーなどの信頼がなければ立ち行かない。常にそういう意識を持って仕事を続けてい

るという。

目下一番の関心事は、現在（9月時点）J2上位をキープし、J1復帰の期待が高まるサッカーチーム、ジェフユナイテッド市原・千葉のこと。高校時代はサッカーに打ち込み、古河電気工業が実業団サッカーチームを持っていることも入社を決めた理由の一つというほど、サッカー愛に溢れる森平氏。勝てば自身のモチベーションアップにつながるのはもちろんだが、今の立場では会社の知名度が高まって雇用や働く社員のやる気に結び付いてくれればと願う。そう語る表情には、サッカーファンと経営者の二つの顔が見えた。

社会インフラを支える製品・サービスの提供で社会課題の解決に貢献し、「つづく」をつくり、世界を明るくする。」を体現する

日本における電線製造の草分けとして始まつた古河電気工業。情報通信、エネルギー、自動車、エレクトロニクスなど、多岐にわたる分野で社会インフラを支える製品・サービスを提供し、社会課題の解決に貢献している。電力消費が伸び続ける中、「光電融合」「核融合発電」などが世界的な関心を集めているが、同社はこれらの実現に欠かせない基盤技術を持ち、実用化に向けた取り組みを加速させており、まさに時代の追い風が吹いている。一昨年、社長に就任した森平英也氏に、持続的成長に向けた取り組みと、今後の展望を聞いた。

銅の精練と加工、電線製造を祖業に 近代日本の社会発展に貢献

伊藤 今回は日本を代表する非鉄金属メーカーである古河電気工業の森平英也社長にお話を伺いました。初めて「古河グループ」についてご紹介いたしましたで

る会社が「古河機械金属」で、創業から今年で150年になります。2番目が当社で、前身の「本所溶銅所」「横浜電線製造所」の創立から昨年140年を迎えました。3番目が「ADEKA（旧社名・旭電化工業）」になります。そのあとは当社と海外企業との合併で「横浜ゴム」と「富士電機」、当社と東京電力の前身である東京電燈との合併で「日本軽金属」、さらに「日本ゼオン」と「富士通」ができました。これらが三水会の中核をなすグループ会社になります。もともと古河とい

く創業家の名前を冠した比較的大きな会社は、古河機械金属と当社しかありません。

横浜ゴムは当社の前身の横浜電線製造と米グッドリッチ社との合併で設立された、ゴムや自動車タイヤのメーカーです。富士電機はFURUKAWAの「FU」と、独SIEMENS（ジー・メンス）社の「SI」を取って社名にしました。そのため本当は「FUSI」ですが、読み方が「フジ」なので、当て字で富士を付けたものです。富士電機は重電の変圧器などの製造から始まりましたが、